

講義室の空気かくはん・照明・空調も自動切断

# 名大エコ作戦 学生にも浸透

名古屋大経済学部が、04年度から省エネ対策に取り組んだところ、昨年度の光熱水料が77.3万円と対策前よりも約30%削減できたことがわかった。暖房費を抑えるため、大講義室に空気かくはんするファンを付けたり、2時間おきに照明や空調が自動的に切れるシステムを導入したり。荒山裕行学部長は「学生には生きた経済学を学んでもらっている」と話す。(深津慶造)

## 経済学部 光熱水料、3割削減

大きな講義室では、位置によって温度にムラが出やすい。同大の理系、文系の研究者が合同でつくるエネルギーマネジメント研究・検討会が、300人を収容できる経済学部第1講義室(約300平方メートル)で調べたところ、冬季の場合、床面付近の温度は、机上付近よりも約3度低いことがわかった。

「足元の温度に合わせて空調の温度を設定するため、どうしても設定温度が高くなりがちだった」。同大事務局はこう説明する。

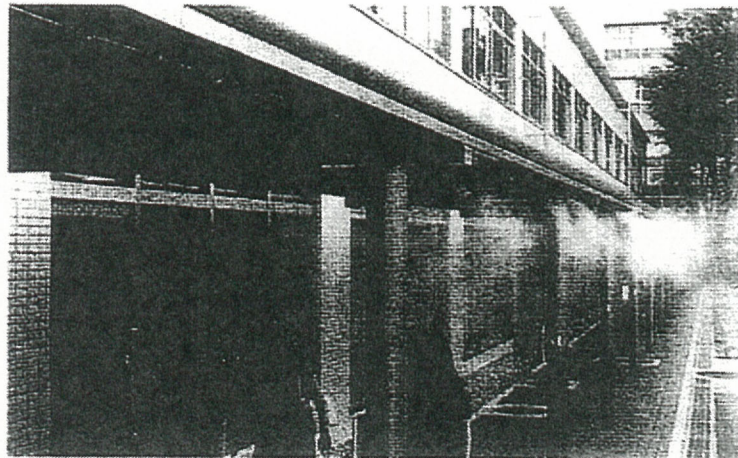
このため、第1講義室

の天井に小型ファンを10基設置し、天井付近に滞留する空気を床面にまで到達させるようにした。

エネルギーマネジメント研究・検討会の調査によると、ファンを動かすだけで床面での温度が2.5度上昇し、空調装置のエネルギー消費量も最大で約17%削減できたという。

同学部では、学部棟を改装した04年度末から、2時間おきに講義室や研究室の照明や空調が自動的に切れるシステムも導入している。消し忘れを防ぐためだ。

省エネ対策は、システ



渡り廊下に設置されたミスト装置—名古屋  
市千種区の名古屋大学で、佐藤慈子撮影

は一つおき。経済学部の事務室では、多少暑くても、冷房を入れずに窓を開け、風を通すことでのいっている。最近では、学生たちにも省エネの意識がだいぶ浸透し、講義室や研究室などで自ら進んで窓を開けるといふ。

今夏からは、講義室を結ぶ渡り廊下に、細かな水滴を噴射して気化熱で気温を下げる「ドライミスト」も設置した。荒山学部長は「これで1.5〜2度は確実に違う。冷房費はさらに抑えられるのではないか」と話している。